

宮沢賢治とその生徒の経済的・教育的階層

牧千夏

はじめに

おれたちはみな農民である ずゐぶん忙がしく仕事もつらい

よく知られた宮沢賢治の「農民芸術概論概論綱要」（以下、「綱要」）はこう始まる。ここから、大根をかじって糊口を凌ぐ貧しい「農民」の姿と、彼らに向けて熱心に芸術を説く宮沢の姿が想像されるかもしれない。しかし、こうしたイメージは、東北と言えば凶作、宮沢と言えば童話作家といった一般的な印象に支えられている。「農民」といつても一枚岩でない。宮沢賢治も、作家という面のみをもつのではない。

本稿は「綱要」の理解のために、農民芸術論を講義した宮沢と彼の講義を受けた生徒と取り上げ、岩手県における彼らの経済的・教育的階層を確認する。宮沢の農民芸術論を考える際、彼の居住した岩手県花巻における経済的・教育的階層を踏まえておく必要がある。なぜなら農民芸術論は、花巻農学校・岩手県国民高等学校・私塾の羅須地人協会で講義されたものであり、そのために農民芸術論は宮沢の階層とそれを受講する生徒の階層が深く考慮されているからである。

宮沢賢治は作家研究が盛んになされてきた。そのため、本稿の取り組みは、これまでの賢治研究の一部として受け取られるかもしれない。本稿は

これまで蓄積されてきた作家研究に多くを学んでいるが、これまでの研究では宮沢の身近な情報が集められても、それがその時代や地域のなかで相対化されてこなかった。つまり、それらの情報がどのような意味を持つかについてはあまり検証されてこなかったのである。後述するが、同時代の思潮のなかで相対化を試みた先行研究もあったが、それは中央の思潮に着眼したものであり、地域的な視点はとられていなかった。

以上を踏まえ、本稿は農民芸術論が講義されたその時代性や地域性を整理する。そうすることで、宮沢の農民芸術論がその時代、その地域、その対象者にとって、どのような意味を持ったのかを考える一助となることを目標としている。

一 宮沢賢治の階層

宮沢の農民芸術論は、一連の取り組みとして次のように整理できる。宮沢は、1921年に花巻農学校（前・稗貫農学校）教諭に着任したのち、農学校の生徒らに詩や童話を読み聞かせ、自ら脚本を書いた劇を上演していた。これ自体農民芸術の実践となっているが、論としてまとめるきっかけとなったのは、1926年に出講した岩手県国民高等学校の「農民芸術」の講義である。この講義の後、宮沢は退職し、その後独居農耕生活を始め

る。同時に、私塾・羅須地人協会を開設し、ここで「労農詩」等の講義をした。これらの講義に並行して1926年6月頃「綱要」を私的にまとめたと考えられる〔16下・315〕。

以上の一連の農民芸術は、宮沢がその生徒に向けて実践・講義し、構想されたものだ。この宮沢とその生徒との階層を一言で言えば、盛岡高等農林を卒業した花巻農学校教員と農学校および岩手県国民高等学校の生徒である。こうした事実はよく知られているが、その当時の岩手県において、これらの階層がどう認識されていたかについては、あまり考察されなかった。これに関連する先行研究の指摘は、次のようである。

まず研究の初期には、宮沢が高級な知識人の階層にいと捉えられ、そして彼の農民芸術論は教育水準の低い階層の農民に向けた独りよがりの講義だと指摘された。戦後の知識人批判のなかで、宮沢も知識人として批判されたのである。中村稔氏は「けっして農民ではなかった」宮沢が、観念的な農民芸術論を「講義についてゆけぬ農民たち」に講じたことを「空虚」と批判した⁽¹⁾。北川透氏は、知識人である宮沢が「芸術などというものから疎外されたところに生活の基層を持っている農民」に向かって「観念的で図式的な農村美化」をしたことを「欺瞞」と批判した⁽²⁾。

さらにそれは1990年代に入って、農民の実態に目を背け農村を美的に表現したものだとして捉えられ、農本主義的な国家主義やファシズムのアジテーションとして機能したと批判された。村井紀氏は、「農民芸術概論綱要」などというものは、娘を売っている農民と農村を芸術化し美学化したもの」だと指摘し、宮沢の農民表象からは「自己同一的な『日本』が見出され、美学的に『近代の超克』が見出される」と批判した⁽³⁾。

以上のような指摘が前提としているのは、宮沢と花巻農学校生徒とに経済的・教育的な懸隔があるとする見方である。宮沢は経済的にも教育的に

も高級な階層におり、講義を受けた生徒は無教育で貧困な階層にいた。こうした懸隔のもとで、宮沢が、生徒の実態にそぐわない高級な芸術論を講じたというのである。とりわけ、生徒側の貧困が当時の東北の凶作に重ねられ、強調されてきたきらいがある。しかし、こうした指摘は、その当時の認識として適切なのだろうか。「知識人」「地主」「農民」といつても、一枚岩でなくそれぞれに階層をもつ。それぞれは、広く隔てられた階層ではなく、経済的・教育的に重なりがあり、社会的な交流もあった。本節ではまず、宮沢の階層が岩手県という地域でどう認識されていたかを確認する。

では第1に、宮沢の経済的な階層から確認しよう。宮沢は自活していた期間が短いため、出身階層である父・政次郎の階層に着目する。『岩手県紳士録』（岩手県実業倶楽部、1916）を見ると、稗貫郡内で所得税額は17番目（151円）、営業税額は13番目（78円）である。摘要を見ると、郡で上位1〜3番目の者には「県下有数」「県下一流」と記載されるが、政次郎は「地方財界二重キを置カレ」とあるのみである。ここから分かるのは、政次郎は、岩手県を14に分けた郡という単位においても、最上級の階層ではなかったということである。そのため、先行研究の「岩手屈指の富豪」という指摘は正しくない⁽⁴⁾。

さらに、土地所有についても見ていこう。政次郎は、10町程度を所有する（田5.7町、畑4.4町）中地主であった。1町前後の土地があれば自作農で一家の生計を立てられるため、むしろ地主としても裕福なのではあるが、

《表1》第29回盛岡中学校卒業生の進路

進路先	名
第一高等学校	5(2)
第二高等学校	3(2)
第三高等学校	1(1)
東北帝国大学農科大学予科	4(4)
早稲田大学予科	2
明治大学予科	1
法政大学予科	1
東京外国語学校	1(1)
東京高等工業学校	3(2)
東京高等商業学校	2(1)
千葉医学専門学校	1
東京私立慈恵院医学専門部	1
東北帝国大学工学専門部	4(4)
新潟医学専門学校	2(1)
盛岡高等農林学校	7(4)
秋田鉱山専門学校	2(2)
小樽高等商業学校	1(1)
山口高等商業学校	1(1)
秋田県師範学校二部	1
岩手県師範学校二部	1
実業従事	10
家事手伝	5
自宅独学	30
東京遊学（不詳）	8
合計	115(24)

※うち既卒生は括弧内

『校友会雑誌』26（盛岡中学校、1915）参照。

宮沢は29回生だった。

10町ほどでは郡内の土地所有者の上位20番のなかにはランキングされない。農政において、大地主として問題にされるのは、田畑併せて50町以上を所有した、全農家の0.1%にあたる階層である⁽⁵⁾。そのため、「東北」の地主階級を代表している⁽⁶⁾。という階級とまではいえない。もちろん宮沢家が岩手県で上層の階層にあることに間違いはないが、先行研究で指摘されたほどの上層にあるのではなく、正確には、郡内で20番前後の資産をもつ、商家兼地主である。

宮沢賢治個人の経済的な階層についても確認しよう。宮沢は、1921年農学校教員として着任したとき、初任給が80円だった（16下・228）。これはもちろん紳士録に記載されるような破格の俸給ではない。しかし、当時の小学校教員の初任給は40円強であり、一般的に中等教育の教員は初等教育の教員の2倍程度の俸給を得ていた⁽⁷⁾。このことは、教育的階層とも

関連するので指摘しておく。

次に、教育的階層を確認する。宮沢の最終学歴は盛岡高等農林学校（以下、盛岡高農）農学科第2部得業（1918）である。この盛岡高農は、専門学校である。この進路を、卒業した盛岡中学校のなかで相対化する。盛岡中学校は、岩手県一の進学校であり、そのなかでは《表1》のような分布があった。当時は、中学卒業後の進路として、必ずしも進学のみが重視されていたわけではない。中学卒業後まで学問を続けることに批判的な家庭は多く、実業従事という進路は、進学より劣る進路として捉えられていなかった。その実業従事を除いて考えれば、最上の進路先は旧制高校および大学予科であり、次が専門学校であった。宮沢は、卒業時点では家事手伝いであったが、その後盛岡高農に進学した。盛岡高農進学という進路は、岩手県のなかで最上位の教育的階層にあったとはいえないが、それに

次ぐ階層にあったといえる。

盛岡高農は農科であるため、農科という観点から全国的に教育的階層を見てみよう。農科の最上は東京帝国大学農科大学、次に東北帝国大学農科大学、それに続いたのが専門学校であった。当時は、盛岡高農・鹿兒島高農・千葉県立園芸専門学校だった⁽⁸⁾。

この農科の専門学校は、農科の大学とは異なる役割を期待されていた。盛岡高農創設の目的は「農業を通じての地域的不均等の解決」すること⁽⁹⁾であった。その背景には、度重なる東北地方の凶作がある。その対策の一拠点として期待されたのである。そのため、農科の専門学校は、日本の農学を率いる学者の養成というよりは、地方の技術者養成を役割としていた。以上のことを踏まえれば、宮沢を「知識人」とした指摘⁽¹⁰⁾は、正しくはあるが、日本トップレベルの学者・技術者という階層ではない。県の農業を指導する技術者・教育者という階層にあったという方が適切である。

続いて、農学校教諭という宮沢の職業からも教育的階層を確認する。宮沢の卒業した盛岡高農農科の進路先を見てみよう。《表2》にあるように、中学校・農学校教諭は3番目に多く、盛岡高農のなかでは一般的な進路だった。

《表2》盛岡高等農林学校農学科
1916-17年度 得業生進路先

進路先	名
自営	17
県庁技手(県立農事試験場・県農会等)	16
中学校・農学校教諭	11
社員(農場員含む)	11
大学生	6
農商務省	4
兵役	4
渡米	5
盛岡高農講師等	3
死亡	1
合計	78

『同窓会報』1(盛岡高農同窓会、1920)参照。宮沢は1917年度の得業生。

た。

当時、この中学校・農学校は、限られた者のみのもので中等教育機関であった。1916年に岩手県では、尋常および高等小学校が671校(うち分校238校)あるのに対し、その上級の学校である中学校は4校、県立農学校は1校、郡市町村立農学校も1校しかない⁽¹¹⁾。そのため、農学校教諭という職は、県有数の中等教育機関の指導者であったのである。

この立場は、進路先で2番目に多い県庁技手という職業と通じる。ここでいう技手は、県農会・県立農事試験場で勤務するため、県の農業を指導する立場にある。つまり、盛岡高農得業生は、技手にしても教諭にしても、県の有数の機関において指導的立場に立っていたといえる⁽¹²⁾。

二 花巻農学校の生徒の階層

続いて、農民芸術論を受講し、農民芸術論の対象として想定されていた花巻農学校の生徒について、経済的・教育的な階層を確認する。農民芸術論を体系的に講じたのは、岩手県国民高等学校と私塾・羅須地人協会である。しかし、この2つの機関は資料が残っておらず、受講生の情報が得られない。両機関で学んだ生徒は、花巻農学校卒業生とほぼ同じ階層であったといわれることから⁽¹³⁾、比較的資料が豊富な花巻農学校(元・稗貫農学校)に着目する。

花巻農学校生徒の経済的階層は、小地主・自作農だったと考えられる。岡田洋司氏は、当時の日本における農村子弟の出身階級と最終学歴との相関について「中学校、およびそれ以上―地主、高等小学校―自作、尋常小学校―小作という対応関係」⁽¹⁴⁾があると指摘している。これは花巻農学校生

徒にもおよそ当てはまる。花巻農学校前身の稗貫農学校の在校生家庭調（1920）には、在校生の父兄の職業が「地主5自作農41自小作農7小作農1その他7」⁽¹⁵⁾と記されている。そのため、同校の生徒の出身階級の中核は、小地主く自作農にあたりと考えられる。これは岩手県の農家のなかでは上層に位置する。当時、岩手県の農家は、自作が4割・自小作が4割・小作が2割であった⁽¹⁶⁾。自分の土地を持ち、生活資金の余剰で子弟を小学校より上にやれる、ある程度経済的余裕のあった階層だったのである。先行研究のなかには農民芸術論の「農民」を「娘身売りに欠食児童」という最下層の小作人として捉えた論があったが、その階層とは異なる。確かに「綱要」自体でも、農民の経済的な困難さは強調されているが、それは岩手県全体で見れば、上層にある農家の困難さだったのである。

次に花巻農学校生徒の教育的階層を見ていく。第1節でも指摘したように、農学校は中学校や高等女学校に並ぶ県有数の中等教育機関であった。岩手県で最も優れた農学校は盛岡農学校であるが、花巻農学校はそれに次ぐ位置にあった。花巻農学校は、乙種（修業年限2ヶ年）から1926年に甲種（修業年限3ヶ年）に昇格している。この教育的な位置づけは生徒も自覚していた。「三年制度の甲種に昇格してからの農学校は地方農家の子弟には憧れの的でもあった」⁽¹⁷⁾という証言がある。宮沢もこれを認識していたようで、小品「或る農学生の日誌」⁽¹⁸⁾では、農学校の生徒が「農学校終ったって自分だけいゝことをするな」（10・262）と妬まれる場面を描いていた。彼らは地域で高い教育を受けた一部の者として見られ、彼ら自身にもその自覚があったのである。

そのため、花巻農学校卒業生は、それ相応の職業についた。《表3》を見ると、就職先で多くを占めるのは、小学校・村役場、または穀物検査場・村農会だと分かる。これらは、郡立・村立であるため、彼らは公務員また

《表3》花巻農学校卒業生進路先

卒業年	実業	就職	学生	兵役	就職先詳細
1922	10	6	0	0	小学校教員2、 <u>穀物検査所</u> 、花巻温泉会社、樺太堀内工事事務所、河北新聞社
1923	14	9	2	1	小学校教員2、農学校教員2、 <u>穀物検査所検査員</u> 2、東京自動車運転手、大阪マルキ号株式会社、不詳社員
1924	16	15	1	4	小学校教員6、 <u>村農会技手</u> 4、銀行員2、樺太王子製紙会社社員、梅津金物店員、不詳社員
1925	11	15	2	3	小学校教員6、 <u>補習学校教員</u> 、 <u>村農会技手</u> 4、 <u>村役場</u> 2、県庁、樺太丸善商店
1926	20	14	4	1	小学校教員4、 <u>補習学校教員</u> 2、 <u>村農会技手</u> 2、 <u>村役場</u> 、 <u>穀物検査所</u> 2、花巻電気会社、種鶏場、花巻町丸三支店
1927	-	-	-	-	記載なし
1928	24	17	3	0	小学校教員6、 <u>分教場教員</u> 、 <u>村農会技手</u> 、 <u>村役場</u> 、不詳官吏、銀行員、発電所、農場員2、東京福助足袋花巻出張所、三益社

佐藤成『宮沢賢治地人への道』（私家版、1983）に転載された『花巻農学校会報』4（1929）参照。

は技術者として郡や村を指導・管理する立場に立ったといえる。また、進路先として最多の実業は、ほとんどが家業の農家である。自作農上層は、村の農業指導・管理を期待された層であり、⁽¹⁸⁾先の就職先と同様の社会的立

場にあった。

最後に付け加えたいのは、この花巻農学校生徒は当時「農村青年」と呼ばれた層だということである。「農村青年」は一部の農家子弟を示す語として、当時広く認知されていた。農村青年を冠した特集は「農村青年の奮起」(『農政研究』3(3)、1924)や「農村青年に寄す」(『改造』5(9)1923)など多数あった。さらにそれを、岩手の農村青年自身も自覚していたようである。花巻農学校ではないが、同じく県内農学校である県立盛岡農学校の校友会誌には「農村青年」を自認する発言が多数見られる⁽¹⁹⁾。岡田洋司氏は「農村青年」が、耕作しつつ村を改善・指導する人物を示す語として用いられていたことを指摘している。山本瀧之助『田舎青年』(私家版、1896)のいう明治の地方青年を継ぐ概念とした⁽²⁰⁾。この「農村青年」認識は、後に制度化される。1932年の農山漁村経済更生運動では、「農村中堅人物」として指定され、村の管理・調査を行い、更生計画実行を任されることになった。花巻農学校の生徒が、経済的にも教育的にも地域社会で上層にいたことを指摘したが、卒業後はこうした立場から村をまとめる実質的な役割を担っていくのである。

おわりに

宮沢は、経済的には稗貫郡で20番程度の上層の階層に位置した。教育的には、中学校盛岡高農と県有数の教育過程に進み、それは県の指導的な役割を担う階層であった。一方、宮沢の講義を受けた花巻農学校の生徒は、経済的には地主・自作農の家庭の出身で、農家としては上層に位置した。教育的にも、中学校に次ぐ高度な教育を受けた階層に位置し、彼らはその後村で指導的な役割を担っていった。

以上を踏まえれば、先行研究で指摘された宮沢と花巻農学校生徒とに経済的・教育的な懸隔があると見る見方は正しいとはいえない。両者は当時の岩手県のなかで、経済的にも教育的にも上層に位置し、隣接した階層にあったのである。そして専門学校を卒業した県の指導的な階層が、村の指導者たる農村青年を指導するというのは、当時制度的にも慣例的にも一般的であった。そうした教育課程のなかで宮沢の農民芸術論は講じられていたのである。

《付記》引用の漢字は適宜現行のものに改め、改行はスラッシュで示した。引用した資料・参考資料の副題は省略した。宮沢作品の引用は【新】校本宮沢賢治全集(筑摩書房、1995(2001)から行い、「巻・頁数」を示した。引用部分の傍点は筆者が付した。

注

- (1) 中村稔「『農民芸術概論』について」(『定本宮沢賢治』筑摩書房、1972)165・170頁。初版は1965年発行。
- (2) 北川透『『農民芸術概論』をめぐって』(『ユリイカ』9(10)、1977)279頁。
- (3) 村井紀「戦前の思考」(『情況』8(4)、1997)26・28頁。なお、この批判は、私小説にも向けられている。
- (4) 前掲 村井「戦前の思考」26頁。
- (5) 川原仁左エ門『岩手県農会史』(刊行会出版、1968)158頁。中地

- 主といったが、一般的に大地主が10町以上、中地主が5〜10町と区分けされるため、大地主下層ともいえる。
- (6) 前掲 村井「戦前の思考」28頁。
- (7) 山田 浩之「戦前における中等教員社会の階層性」(『教育社会学研究』50、1992) 309頁
- (8) 小沢俊郎「解説」(『宮沢賢治 友への手紙』筑摩書房、1968) 198頁。
- (9) 「盛岡高等農林学校設立の沿革」(『岩手大学農学部七十五年史』教育文化出版、1979) 75〜76頁。
- (10) 前掲 北川「『農民芸術概論』をめぐる」、村井紀「宮沢賢治という現象」(『日本文学』47(5)、1998) 92頁。
- (11) 岩手県『岩手県要覧(大正五年)』2頁。他には県立師範が校が1校、県立女学校が2校ある。
- (12) じっさい、宮沢着任時の稗貫農学校教諭は6名中、宮沢含め3名(校長・島山栄一郎、堀籠文之進、宮沢)が盛岡高農卒であり、後に農事講習会等で関わる岩手県農会職員(技師・大森堅弥、技手・佐藤有三、川原仁左エ門)も盛岡高農卒であった。
- (13) 自身も卒業生である伊藤清一は、岩手県国民高等学校の生徒を「卒業者帰村後は、皆中堅人物として村の要職を担当し、又は堅実なる農業経営に当る」と指摘した。『花農六十周年記念誌』(岩手県立花巻農業高等学校、1969) 68頁。また菊池信一は羅須地人協会の会員を「特に農学校と国高の卒業生の中からと、それに近在の篤農老青年」と指摘した。「石鳥谷肥料相談所の思ひ出」(草野心平編『宮沢賢治研究』十字屋書店、1939) 419頁。
- (14) 岡田洋司「ある『疾風怒濤』1幼少時代」(『農村青年』稲垣稔) 不二出版、1985) 36頁。
- (15) 佐藤成『証言宮沢賢治先生』(農山漁村文化協会、1992) 267頁。『大正十年度岩手県稗貫農学校要覧』からの引用。宮沢が勤務していたときは、校種が昇格していたため、父兄の階層も少し上がったと考えられる。
- (16) 『昭和二年 岩手県勢要覧』(岩手県、1928) 16頁。当時は、地主も手作り地主が8割を超えるため、地主は自作に含まれていると考えられる。『本邦農業要覧』(大日本農会、1925) 31頁。
- (17) 多田大二「昭和前期の思ひ出」(前掲『花農六十周年記念誌』) 83頁。
- (18) これは慣例としてあったが、1932年の農山漁村経済更生運動で制度化される。ここで、自作農上層は「農村中堅人物」として村の更生計画実行を任された。
- (19) 『校友会誌』14(岩手県立農学校交會、1918)。弁論部の題目参照。
- (20) 岡田洋司「はじめに」(前掲『農村青年』稲垣稔) 8頁。

Economic and educational class of Kenji Miyazawa and his students in Iwate Prefecture

MAKI Chinatsu*

The purpose of this paper is to investigate the economic and educational hierarchy of Kenji Miyazawa and the students who attended his lectures. Kenji Miyazawa's "Art Theory for Farmers" was lectured at agricultural schools and adult education. Therefore, Kenji Miyazawa's "Art Theory for Farmers" is based on the class of students who took the lecture.

キーワード：宮沢賢治，農民芸術概論綱要，農学校，岩手県

*牧千夏 一般科 准教授。また本稿は、第 12 回未来を強くする子育てプロジェクト スミセイ女性研究者奨励賞の成果の一部である。